

Title	内田銀蔵著 日本経済史の研究
Sub Title	
Author	野村, 兼太郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1921
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.15, No.8 (1921. 8) ,p.1204(142)- 1207(145)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19210801-0142

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

William Morris であらう。この書は上下二巻八
 百頁に近い龐然たる大冊で、最も豊富なる文獻
 的研究である。この書がモリスに關する最大權
 威なることはモリス研究家の均しく認める所で
 ある。最も普通に讀まれる A. Clutton Brock,
 William Morris: His Work and Influence は
 Home University Library 中の一冊であるが、僅
 々二百數十頁の中に藝術家並に社會主義者とし
 てのモリスの全般を明快なる筆致を以て描寫し
 た便利なる書である。この書は本邦のモリス研
 究家によつて利用されたこともある。(室伏高信
 氏、白鳥省吾氏のモリスに關する論文を見よ)
 次に社會主義者としてのモリスを小冊子の中に
 書いたものとしては Mrs. Townshend, William
 Morris and the Ideal of Communism (Biographical
 Series. No. 2. Fabian Society) と Holbrook
 Jackson, William Morris, Socialist-craftsman. (Social
 Reformer Series. No. 3) とがある。前者は興味
 多い筆致を以て、彼が共產主義者となつた経路
 を明かにし、後者は秩序正しく彼の社會主義的

思想を描いてゐる。是等の諸書に加へるのこゝ
 の藝術を主題とした Aymer Vallance, William
 Morris, His Art, Writings and Public Life. の
 文學的方面を主として研究した Alfred Noyes の
 William Morris を以てしたならば、モリスの全
 生涯とその事業並に思想とは略ぼ完全に知るこ
 とが出来てあらう。尙ほこの外、John Spargo,
 Socialism of William Morris, John Drinkwater,
 William Morris, a Critical Study. Arthur Compto
 m-Rickett, William Morris, a Study in Personality
 等の参考書があるが、今自分の机上には生憎持
 合せがない。(加田哲二)

内田銀藏著「日本經濟史の研究」

上巻七四〇頁定價七圓五十錢
 下巻七九四頁定價七圓八十錢
 同文館發行

は、我が學界の爲めに慶賀すべきことなり。殊に
 日本經濟史の研究を以つて全集最初の二巻とな
 したることは極めて當を得たりと云ふべし。博
 士の日本經濟史及び史學に對する造詣の深き他
 に其の比を見ず、加ふるに考證論述に周到の用
 意を致されしこと、勿論學者として當然のこと
 なりとは云へ、我等後進の最も學ぶべき點なり。

「大要を學習する上に於ても、單に考證の結果
 を聞き、討究により到達せられたる結論を知る
 のみにては、不充分なりと云ふべく、それだけ
 にては得る所淺くして自から物足らぬ所あるを
 免れざるべし。凡べて歴史の學科に於て、單
 に考證の結果、討究の結論のみを述べ少しも之
 に到達したる所以の手續に説き及らざるは、恰
 も自然科學の場合に於て毫も實驗を爲さず、又
 實驗の方法を指示せざるに似たるものあらん。」
 (上巻六二二頁)故に博士の論斷を下すや極めて
 嚴密なる考證に基けり。例へば「我國中古の班
 田收授法及近時まで本邦中所々に存在せし田地
 定期割替の慣行に就きて」の如きは其の好例な

り。斯くの如き用意の下に書かるべき日本經濟
 史が其の周到を期する博士の自重に依つて終に
 著れずして止みたるは吾人の最も遺憾とするこ
 ころなり。僅に未完稿「日本經濟史」と「日本經
 濟史概要」を以つて其の一般を推するのみ。

然し乍ら博士の經濟史に對する解釋は必ずし
 も明確なるものにあらず。即ち「經濟史の目的
 とする所は、人類發達の歴史に於ける外物使用
 の方面を研究し、人類は如何に財を理し、生を
 營み、其の欲望を充足し來りたるかといふ問題
 を、其の總ての關係に於て考證論究するにあり
 といふべし。實に厚生利用に關する總ての現象
 の進化は、即ち經濟史の討究論明すべき題目な
 りとす。」(下巻四三〇頁)云ふ迄もなく斯くの如
 きは人間が其の欲望を満足させんが爲めには財
 を理することを必要とし、斯く外物資用の必要
 より生ずる一切の人生活動を汎稱して經濟と云
 ふに基く。斯くの如き經濟の定義の明確ならざ
 るは敢てこゝに論究する必要あらざるべし。然
 し乍ら經濟の意義未だ確説なき現在に於いて獨

り博士を責むるは素より酷なるべし。他方歴史そのものの意義に關する博士の意見を見るに、博士は歴史を解釋して三要件を擧げたり、「第一具體的事實に就きて研究すること。第二、事實を其の動く所の成り行きに就きて考察すること。第三、事實を由來あり、又效果あるものとして調査すること。」(上卷六二二頁)其の言は未だ十分明確なりと云ふを得ざれども、素より引用せる箇所は稍々古き講義録の一切なれば、殊更に嚴密なることを得ざりしなるべし。比較的を得たりと云ふべし。第三の條件たる事實を由來あり效果あるものと見ることは、暗にある事實が書かんとする歴史に何等かの價值關係ありてふことを豫想するものにあらざるか。更に第一の要件には個別的なる事實が實際惹起されたるものたることを要求し、第二の條件は時間的經過の必要なることを明示せり。事實博士の著作を見る時、經濟史が法制史に墮せず、政治史に終らずよく經濟史たるの實を擧げ得たり。唯惜むらくは完結されざりしことなりとす。然れど

「日本上古の氏族制度に就きて」、「日本古代の村落制に就きて」、「本邦上古の地租に就きて」、「沖繩縣の土地制度」、「徳川時代の街道及宿驛に關する一二の所見」、「大福神傳」及び馬場正道に關する三種の論文(以上下卷)等に於いて博士の考證の嚴密なるを知り得べし。尙ほ本書下卷には此の外經濟學に關するもの、支那經濟史に關するもの等十數篇を收む。
是等の諸論文に依つて與へらるゝ刺戟と暗示とに依つて更に日本經濟史の原野に一步を進むるを得ば、以つて僅に博士の勞に酬ゆることを得べし。吾人後進の徒は宜しく精進すること必要す、最後に遺稿全集の速に完結せられんことを祈りつゝ、妄評の筆を擱く。

野村兼太郎

も考證其の他種々なる述作はすでにそれだけに甚大なる價值を有し、吾人後學の徒を裨益すること少からず。吾人は宜しく博士の勞多き研鑽に多大の敬意と感謝とを拂はざるべからず。
博士の經濟史そのものに對する意見を詳細に知らんと欲する者は「經濟史總論」、「經濟史の性質及び範圍に就きて」、「經濟史及其の研究法」經濟史の研究に就きて」、「(以上下卷)を見るべし。博士が日本經濟史々料に關する勞作は「日本經濟史研究の材料に就きて」、「日本經濟史參考書」(未完なるは最も惜むべし)、「維新前の經濟書に就いて」(以上上卷)等にて我國經濟史研究者の看過するを得ざるものなり。一般史としては前述したる二著收めて上卷にあり、其の外「本邦租税の沿革」、「日本古代の通貨史に關する研究」、「徳川時代特に中世以後に於ける外國金銀の輸入」(以上上卷)、「維新以前に於ける日本蠶業の發達に就きて」、「日本古代に於ける人民の移住に就きて」(以上下卷)等は特種の經濟史と見るべく、前掲の「田地割替の慣行に就きて」(上卷)を始め

瀬谷佐次郎著 經濟原論

菊版 四四四頁
定價 金四圓
内外出版株式會社

著者瀬谷佐次郎氏は京都の同志社大學教授であつて、本書は氏が同大學法學部に於いて講義した稿本を基として著されたものである(序文)先づ目次によつてその結構を窺ふに氏は全體を三編に分ち、第一編を總論、第二編を生産論、而して第三編を分配論として居る。蓋し在來行はれた四分法なるものは、理論上並びに便宜上の何れより見るも當を得たるものでないといふ論旨に基いたものであつて、この點に於いては大體異論ないところである(本書一〇八一—一頁)。けれども生産、分配の二編とするか、或ひは生産、流通の二編とするかに就いては議論もあるであらうし、氏の態度も明かでない。
氏は經濟學を以て一の記載科學であるとする立場にある。「經濟學ハ經濟現象を支配スル原則ヲ發見シ、之ヲ記載説明スルモノニシテ、一ノ